

經濟論叢

第七十五卷 第六號

- 流民續考……………穂積文雄…(1)
- 新中國における工商業の調整について……………三木毅…(16)
- フランスにおける初期マルクス研究の動向……………吉田静一…(34)
- エム・ラヴェリチエンコ
「資本主義諸國における農民の貧困な状態」
オーグレスメット
「植民地、從屬諸國における農業の衰退」……………富岡裕…(44)
- 資本蓄積……………モーリス・ドップ…(50)
-

〔昭和三十年六月〕

京都大學經濟學會

エム・ラヴリチエンコ

「資本主義諸國における農民の貧困な状態」

オ・クレスメット

「植民地、從屬諸國における農業の衰退」

М. Лавриченко. Бедственное положение крестьянства в капиталистических странах.

О. Кресмер. Упадок сельского хозяйства в колониальных и зависимых странах.

富岡裕

ソ同盟共産黨中央委員會機關誌「コムニスト」とソ同盟科學アカデミー經濟研究所機關誌「經濟の諸問題」は、一九五三年第十四號および一九五四年第六號に夫々エム・ラヴリチエンコの「資本主義諸國における農民の貧困な状態」、オ・クレスメットの「植民地、從屬諸國における農業の衰退」を掲載した。

戦後、農業の衰退、農民の窮乏化は一段と進み、その後の發

展は商業新聞でさえ事態の深刻さをみとめないわけにはいなくなっているが、資本主義の擁護者達は、その基本的原因「農業關係をかくすために絶望的なかずかずの試みを行っている。

この二つの論文は、小農經營の堅實性論や土地肥沃度の遞減法則に根據をおいた絶對的過剩人口論等を論破し、獨占資本と大土地所有者の支配と收奪にこそ基本的な原因があることを明ら

かにするために畫かれたものである。

地域的にも、内容的にも、廣汎な問題を總括的に取扱つてゐるために、理論の十分な展開もみられないし、資料的に不十分と思はれる點も少くない。しかし、ここではこの論文の批判にはふれないで、ただ概要をできるだけ忠實に紹介するにとどめたい。

以下これを紹介しようとするのは、この種の論文が少ない上に、わが國の農業、農民の現状をより正しく認識し、理解するために、なおかなりの意義があると思えるからである。

一 資本主義諸國における農民の貧困な状態

資本主義諸國の農業の現状は、獨占資本の一層の隷屬と、農民の階級分化の激化にその特徴がある。獨占資本と大土地所有者の地位を強化するためにとられた農業政策と、經濟の戰爭路線への移行によつて、獨占資本および大土地所有者と勤勞農民との間の溝がますます深められたが、農業衰退の重要な指標である勤勞農民の破産件數の増大と土地收奪は、すべての資本主義諸國に共通した現象となつてゐる。これは一方において、生産の集中—商品生産に占める資本主義農場の地位の強化が進んだことを物語るが、事實、アメリカでも總數の二％にすぎない資本主義的經營が土地の五分の二を集中し、二萬五千の農場（農場總數の〇・四％）が二二億ドルの商品生産物を生産して

いるのに、三〇〇萬の農場（半數以上）では、僅か一一億ドルしか生産されていないのである。この事實は、小規模な「家族」農場の「繁榮」という資本主義の辯護人達の欺辯を完全に論破するものである。

(1) 資本主義諸國における勤勞農民の經營が破産している主要な原因の一つは、低所得のために生産手段購入の可能性が奪われて、大規模な資本主義經營との競争に堪えられないという事情である。農産物の買付け、加工、販賣が獨占されているために、農産物の價値の大部分が收奪され、直接生産者—農民の收入は著るしく減少しているが、更に工業製品が獨占に集中（たとえばアメリカでは、機械の七五％が四トラスト、肥料の四二％が八社に集中）されている結果、高い獨占價格によつて農民は二重に收奪されている。これは獨占資本による農民奴隸化の特徴的な形態であるが、シェーレは、經濟の軍事化に伴つて、ここ三—四十年間に特に悪化し、（たとえば、アメリカでは一九五二年には工業品價格が四％上昇したのに、農産物價格は一二％低下した）、アメリカの農業生産指數が六％しか増加していないのに、その生産費は三八％も増加した。こうして小農經營における生産物單位當り生産費は、資本制の大經營の場合より二倍も高くなつてゐるのである。

こうした條件の下で、小農民は猫額の土地を維持するために絶望的な努力を拂つてゐるが、借地農民や分益農民になると事

態は更に困難である。彼らは、最近數年間の小作料の二―三倍のはねあがりの中で、カバール的條件で耕作に従事することを餘儀なくされているが、フランスでは借地農民と分益農民は總農家戸數の六〇％に達し、イタリアでは四分の一が分益農民によつて占められ、ネグロが土地所有者側から殘忍な收奪をうけているアメリカ南部でも分益小作制度は廣く行われている。最も困難な状態におかれているのは農業労働者であるが、グレイストハトチンスはその著書「勤勞婦人」の中で、數百萬のアメリカ農業労働者の半奴隸的な状態について、次のように述べている。即ち彼らは返濟不能の負債にしばられ、家族全員が働らきに出なければならぬ程の低賃金で搾取され、そのため季節労働者の五分の一が未成年で占められている程である。

(2) 資本主義諸國における勤勞農民の状態を困難なものにしたもう一つの要因は、土壤に對する掠奪的關係と勤勞者に對する苛酷な搾取である。最大限利潤を追求する資本制の大經營は、單一作物を栽培し、輪作的播種を缺くために土壤體系を破壊し、土地の酸性化、沼澤化を惹起しているが、アメリカでもベンネット博士の下院委員會での證言のように、廣大な回復不能の農業不適地をつくり出し、到るところで農業の衰退を證明する耕地面積の絶對的縮少がおこっている。西歐資本主義諸國では一九三四―三八年の耕地面積を一〇〇とすれば、四九―五一年には九二、七、收穫は九四、六であつた。これに拍車をかけてい

るのが兵站基地、飛行場、射撃場等のための土地收用で、日本でも北海道だけで五千ヘクタールの土地が接収されている。

そして、西歐資本主義諸國では、勤勞者の貧困化とその購買力の低下とからんで、農産物の販路に重大な障害が起り、到るところで恐慌現象をひきおこしている。アメリカの小麥の滞貨は、一九四七年の八千四百萬ブッシェル、一九五二年の二億五千四百萬ブッシェルに對して、一九五三年七月には五億七千五百萬ブッシェルに増大した。この内外の市場に販路を見出しえない餘剩農産物の急激な増大が恐慌現象の深化を物語っている。

(3) 更にもう一つの要因としてあげられるのは經濟の軍事化である。戰爭と、經濟の軍事化は、農民の貧困を清算し、過剰生産恐慌を排除し、農業商品の廣汎な安定した需要を保證すると宣傳されたが、實際にそれがもたらしたものは、重税、最低生活費の上昇、そして農家所得の減少であつた。戦後の小農民の特徴は、負債、特に短期負債の増大にある。アメリカでは、一九四二―五二年の十年間に財産税は十五倍もはねあがり、地租は三倍に上昇したが、これは農家所得の二四％減に導いた。アメリカ農家の八〇％は最低生活費以下の所得しかえられず、二〇％は半飢餓的生存を餘儀なくされているのに、農務省の公式發表では、五三年には前より更に一〇―二〇％低くなつてしまっているのである。

アメリカ上院の資料では二〇%の大農場が六七%の中小農家より所得は大であつたし、「バイエリシエス・フォルクセホ」紙の報道によると、西獨では納税のために週二日働かねばならなかつた。この勤勞農民の絶對的相對的貧困化のなかに、農業の衰退が破局的に反映されている。

社會階級の物質的狀態の明らかな指標は、國民所得の分配にあるが、國民所得に占める農民部分は、アメリカでは、一九四六年の九、四%、一九五一年の七、六%から一九五三年には五%に低下した。十四の西歐資本主義諸國では、二四%の農民が國民所得に占める部分は一四%でしかなかつた。

これは、ブルジョアジーの「小農經營の堅實性論」、ないしは小農經營に機械導入の可能性があるとか、失業、過剰人口清算の可能性があるといった理論、或いは又、大農經營が農業全體の發展を保證するといった理論が、既に完全に破産したことをこの上なく明瞭に物語るものである。

勤勞農民の貧困な狀態は、彼らの間の不滿の増大に導かざるをえない。獨占と大土所有者の側からの搾取の強化、戰爭準備のための反國民的な政策の結果ひきおこされた物質的狀態の悪化に甘んじない廣汎な農民大衆は、大資本と大地主に對する斷乎たる闘争に立ち上つており、その中で民主主義、平和に對する闘いととの間の有機的な連關をますます理解してきている。

「植民地・從諸屬國における農業の衰退」

二 植民地、從屬諸國における農業の衰退

植民地、從屬諸國の農業生産力を破壊し、その停滯と衰退を條件づけているのは、植民地、從屬諸國で形成され、帝國主義の支持をうけ、帝國主義によつて維持されている農業諸關係——封建遺制維持下の大地所有の支配と、獨占資本および地主——領主による零細な或いは土地をもたない農民に對する野蠻な搾取——であるが、この過程は特に資本主義の全般的危機の第二段階に普遍化された。

自然的資源、特に土地に對する掠奪的關係と勤勞者に對する苛酷な搾取は、これらの國では典型的形態と廣汎な規模をとつた。そこでは勤勞者は、外國帝國主義とその土地の領主、地主、商人および高利貸から二重の搾取をうけている。その場合、資本主義的搾取方法と封建的搾取方法とが絡み合つており、しかも封建的土地所有が優位を占めていることが特徴的である。中近東では五——一〇%の地主が七〇——八〇%の土地を所有しているが、エジプト、イラン、ブラジルその他の諸國でも同じような事情にある。

彼らが分益農民、雇役農民に寄生し、收穫の五〇——八〇%、多い場合には九〇%を占有しているのに對し、分益農民、雇役農民の方は半飢餓の生存を辛うじて保證されるだけで、經營改善の可能性など全くもつていない。小農民も又單純再生産すら

安定したものとはいえず、假に資金があつても土地が散在しているため、經營の改善は不可能とされている。

廣大な良地を集中している外國獨占、大地主は、剩餘勞働だけではなく、必要勞働の著しい部分を收穫し、しかも收穫した富を農業に投下することせず、國外或いは都市に持出し、しまつてゐる。

こうして農業の衰退は、植民地、從屬諸國における一般の現象となつてゐる。土地は掠奪的に利用される結果、地味が急速にやせ、收穫は悪くなり、浸蝕されて農耕不適地にされている。これらの現象は、商業新聞でさえ默殺することは出来なくなつてきたが、資本主義の辯護人達は、この眞の原因をおしかくするために、マルサス理論を復活し、絶對的過剰人口の法則をもちだしている。

だが、OONの資料によつても、ペルーでは一、二%、ブラジルでは二%、イラン五、三%、ビルマ二、八%、モロッコ二〇%といつた極めてわずかな土地部分しか耕作されていないし、しかも耕地の大部分がおくれた農法のために完全に利用されていないのである。農業の衰退は絶對的過剰人口のためではなく、初歩的な農法、經濟的、文化的おくれ、農民大衆の極貧等の結果である。マルサス理論はマルクスとレーニンによつて完全に論破されたが、ソ同盟における農業の成果は、事實をもつてこの正しさを裏付けてゐる。亦、植民地、從屬諸國における收穫高

の減少は、自然的法則の作用の結果ではなくて、自然的資源の掠奪、農民からの殘酷な搾取、原料的附屬物にしようとする外國獨占の支配の直接の結果である。植民地、從屬諸國の大部分は、酷熱の氣候と極端に不均衡な雨量のため、人工灌溉のもつ意義は極めて大きい、多くの國では非常に古い灌溉網の遺物が今日まで保存されて利用されている。それらの灌溉技術は初歩的であるが、その多くは地主の管理下にある。しかもアジア中近東では現存の規模では極めて不十分なのである。インドでは全耕地面積の六%、ビルマ六%、インドシナ一四%、タイ一二、七%にしか達していない。しかも灌溉の正しくない體系は土地に直接害を與えている。たとえば、イラクでは計畫的な調節を缺いたため、ここ十年間に一〇—二〇%の土地が酸性化され、残りの土地も、二〇—五〇%以上の低收穫をもたらした。

戦後、灌溉體系の建設、植林、沼澤の排水にかんする大計畫が提出されたが、それは外國獨占の栽培する輸出品の生産増加を目的とし、その大半が紙上のプランに留まつた。インドの經濟發展五カ年計畫では三四萬ヘクタールが灌溉されるが、この資金をひきうけた國際銀行は、實は貴重な礦物資源の原産地を確保することに利害關係をもつていたのである。

帝國主義の支配と植民地、從屬諸國における農業諸關係は、亦、耕地の掠奪的利用をもたらしたが、山林の濫伐は旱魃と洪水を交代に周期的にひきおこしている。これは外國獨占資本の無統

制な經營の直接の結果である。又單一作物栽培は、土壤の浸蝕を促進しているが、これは植民地、從屬諸國を原料的附屬物にしようとするところからくる。アフリカでは落花生や棉の單一作物栽培のために、土地が著るしく疲弊している。

そして農民は、農業機械だけでなく、簡單な農具さえ利用する可能性をもつていない。たとえば、トルコの農村には、農家一〇〇戸に木製手鋤一二、四〇カ村に脱穀機一合しかない。肥料も需要が全體として極めて少ない上に、その殆んどが輸出作物の栽培プランテーションに用いられ、二重の壓迫をうけている極貧農民は、山林濫伐の結果、家畜の糞さえ大部分を燃料に用いなければならず、肥料として利用することは強い制約をうけている。

以上の要因は畜産の衰退を惹起した。小農民の貧困化は、家畜に十分な飼料をあたえることを不可能にさせているからである。家畜總數は減少しており、絶體的な増加がおこつた國でも人口あたりの家畜頭數は減少しており、家畜頭數が多いところ

でも質的な劣悪さを示しているのである。飼料の不足から、中近東、北アフリカ諸國では遊牧が廣く行われているが、これは家畜生産性を低め、飢饉、病氣による死亡率を高めている。

收穫の七〇—八〇%、九〇%さえをも引渡さなければならぬ農民は、土地疲弊と勞働力の浪費に導かれている。灌漑の設備が幼稚なところでは殊更この傾向は強く現われ、これは又勞働生産性の低下をもたらし、マライのゴムも大プランテーションが一エーカーあたり八〇—一二、〇〇〇ポンドであるのに、小農經營では四〇〇ポンドしか生産されていない。

生産手段の私有と最大限利潤の追求は、自然的資源の收奪的利用をうんでいるが、これが農業を氣候的變動に從屬させ、旱魃、洪水をひきおこし、數百萬の生命を奪う飢饉を周期的に各地で繰返させている。

農業諸關係と掠奪的政策の結果ひきおこされた農業の衰退は、植民地、從屬諸國における收穫の減少と、人口あたり食糧生産の減少の中に反映されている。